

令和8年度 病害虫発生調査速報 第1号

ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率検定（結果の速報）

1. 対象作物：水 稲

2. 内 容：ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は、全地点平均 1.3%であった。

3. 調査結果の概要

1) 保毒虫率は、検定した8地点平均 1.3%で、過去10年間の平均 7.0%と比べ低い値となった（第1表）。

2) 近年、イネ縞葉枯病の発生量は数年ごとに増減を繰り返す傾向がある（第1図、第2図）。

第1表 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の地点別状況（%）

検定地点	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年	令和2年	令和3年	令和4年	令和5年	令和6年	令和7年	令和8年	平年
木田郡三木町田中	6.0	5.0	8.0	6.0	17.0	5.0	11.0	10.0	11.0	4.0	2.0	—
高松市下田井町	1.0	3.0	7.0	5.0	14.0	5.0	11.0	4.0	3.0	1.0	0.0	—
高松市香川町川東上	6.0	10.1	8.0	13.0	18.0	15.0	17.0	14.0	9.0	2.2	1.0	—
綾歌郡綾川町陶	2.0	3.0	7.0	8.0	13.0	6.0	11.0	6.0	1.0	5.0	2.0	—
綾歌郡綾川町北	5.0	4.5	7.0	8.0	17.0	11.0	8.0	2.0	11.0	4.0	5.0	—
仲多度郡まんのう町東高篠 ^{※1}	1.0	3.0	11.0	6.0	11.0	13.0	7.0	4.0	3.0	0.0	0.0	—
丸亀市金倉町	4.0	3.0	8.0	5.0	6.0	5.0	7.0	5.0	5.0	4.0	0.0	—
三豊市高瀬町比地 ^{※2}	—	—	—	3.0	12.0	13.8	6.0	9.0	3.0	0.0	0.0	—
平均	3.6	4.5	8.0	6.8	13.5	9.2	9.8	6.8	5.8	2.5	1.3	7.0

注)5月下旬に小麦で採集したヒメトビウンカの中老年幼虫を検体とし、個体別に検定した。

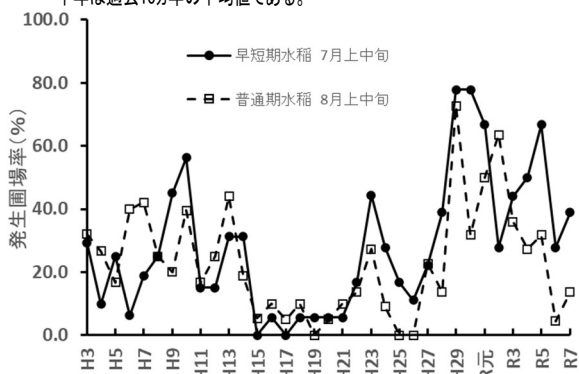
検体数は各地点100個体とし、採集個体数が100に満たない場合は全個体とした。

平成25年から令和元年までは高比重ラテックス凝集反応法で、令和元年からは簡易ELISA法で検定し、陽性の比率を保毒虫率とした。

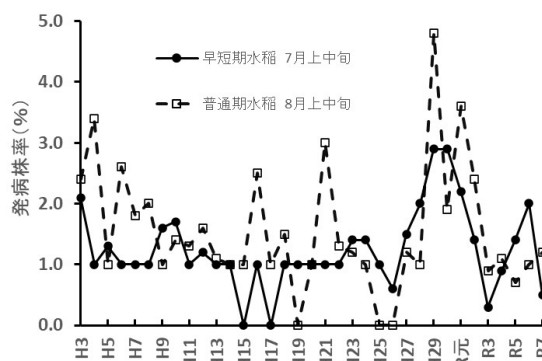
令和元年度に高比重ラテックス法と簡易ELISA法で調査した結果、両手法でほとんど差がないことを確認した。

令和5年以前は仲多度郡琴平町苗田(※1)、三豊市豊中町比地大(※2)。

平年は過去10カ年の平均値である。



第1図 縞葉枯病発生圃場率の年次推移



第2図 縞葉枯病発病株率の年次推移

4. 防除実施上の留意点

1) ウンカ類対象の育苗箱施薬を行う。育苗箱施薬を行っていない圃場やイネ縞葉枯病の発生が多い地域では、本田初期にヒメトビウンカを防除し、水田内でのヒメトビウンカ幼虫の密度上昇を抑える。薬剤の選定にあたっては、地域の防除暦等を参考にする。

2) 本田初期の発病株は二次伝染を引き起こすため、抜き取って処分する。

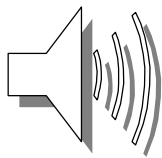
3) 収穫後に発生する再生稲（ひこばえ）や水田周辺のイネ科雑草が、ヒメトビウンカの生息・越冬場所となる。収穫後は耕起し、刈り株をすきこむ他、雑草の管理を徹底する。



写真1 縞葉枯病の症状



写真2 ヒメトビウンカ成虫



6月～8月は、農薬危害防止運動月間です。
農薬の使用が増える時期ですので、今一度、農薬を適正に
使用できているか、チェックしましょう。

病虫害防除所インターネットホームページ

URL: <https://www.pref.kagawa.lg.jp/byogaichubojou/index.html>

